

[B年] 公現後第6主日(2022年2月13日)**【旧約聖書日課】 箴言 2章1～9節**

- 1 わが子よ
わたしの言葉を受け入れ、戒めを大切にしてください。
- 2 知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら
- 3 分別に呼びかけ、
英知に向かって声をあげるなら
- 4 銀を求めるようにそれを尋ね
宝物を求めるようにそれを捜すなら
- 5 あなたは主を畏れることを悟り
神を知ることには到達するであろう。
- 6 知恵を授けるのは主。主の口は知識と英知を与える。
- 7 主は正しい人のために力を
完全な道を歩く人のために盾を備えて
- 8 裁きの道を守り
主の慈しみに生きる人の道を見守ってください。
- 9 また、あなたは悟るであろう。
正義と裁きと公平はすべて幸いに導く、と。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 2章6～10節**

6しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。7わたしたちが語るのには、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から決めておられたものです。8この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。9しかし、このことは、
「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。10わたしたちには、神が「霊」によってそのことを明らかに示してくださいました。「霊」は一切のことを、神の深みさえも究めます。

【福音書日課】 マルコによる福音書 4章1～9節

1イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびたしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。2イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。3「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。6しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。8また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」9そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

【参考】 マルコによる福音書 4章13～20節

13また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。14種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。15道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまう。18また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、19この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。20良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

箴言 2章1～9節

- 1 子よ、もし私の言葉を受け入れ
私の戒めをあなたの内に納め
- 2 知恵に耳を傾け
英知に心を向けるなら
- 3 さらに分別に呼びかけ
英知に向かって声を上げ
- 4 銀を求めるようにそれを尋ね
隠された宝を求めるようにそれを探すなら
- 5 その時、あなたは主を畏れることを見極め
神の知識を見いだすだろう。
- 6 まさしく、主が知恵を授け
主の口から知識と英知が出る。
- 7 主は正しい人には良い考えを
完全な道を歩む人には盾を備える。
- 8 裁きの道筋も従い
忠実な人の道を守るために。
- 9 その時、あなたは見極められるようになる
正義と公正と公平が
幸いに至る唯一の道のりであることを。

コリントの信徒への手紙一 2章6～10節

6しかし、私たちは、成熟した人たち〔真訳→完全な者たち〕の間では、知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の無力な支配者たちの知恵でもありません。7私たちが語るのは、隠された秘義としての神の知恵であって、神が私たちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。8この世の支配者たちは誰一人、この知恵を悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。9こう書いてあるとおりです。

「目が見もせず、耳が聞きもせず

人の心に思い浮かびもしなかったことを
神はご自分を愛する者たちに準備された。」

10私たちには、神は霊を通してこのことを啓示してくださったのです。霊はあらゆることを、神の深みさえも究めるからです。

マルコによる福音書 4章1～9節

1イエスは、再び湖〔直訳→海〕のほとりて教え始められた。すると、おびたしい群衆が御もとに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられた。群衆は皆岸辺にいた。2イエスはたとえを用いて多くのことを教えられ、その中で次のように言われた。3「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐに芽を出した。6しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて塞いだので、実を結ばなかった。8また、ほかの種は、良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍になった。」9そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

〔参考〕マルコによる福音書 4章13～20節

13また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。14「種を蒔く人」は、神の言葉を蒔くのである。15道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために苦難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。18また、茨の中に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くが、19世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が入って来て、御言葉を塞いで実を結ばない。20良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・2月13日「公現後第6主日」の日課主題は「教えるキリスト」。

・旧約日課は、「箴言」から、「父の諭し」と呼ばれる教えの一つの冒頭箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、パウロが自らの教えの正統性を「神の知恵」という視点から訴える箇所の一部。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「種を蒔く人のたとえ」の箇所。

旧約日課(箴言2章より)

・「箴言」は、ユダヤ教正典第三部「諸書」に置かれた格言集。いわゆる「知恵文学」に分類され、ソロモン王に帰されている。「諸書」に収められた文書がユダヤ教社会の中で正典としての地位を確立したのは、後1世紀末で、ユダヤ戦争後の時代に「ラビ的ユダヤ教」が主流派として形成される過程で公式に認められるに至った。とは言え、正典「律法と預言者」に付属する文書としての扱いは、すでに前2世紀初頭には概ね固まっていたと推測され、前200年ごろにアレクサンドリアで編纂されたと推定される「ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳=セプチュアギンタ)」には「諸書」文書が含まれている(ただし、「律法・預言者・諸書」というユダヤ教正典の三部構成は崩されている)。「諸書」諸文書の多くは、おそらく、バビロン捕囚解放後のペルシア支配時代、まずエルサレム神殿の再建と共に「律法と預言者」が正典として確立して「ユダヤ教共同体」の屋台骨が組み立てられたのに続いて、実際の「ユダヤ教共同体」としての営みを重ねていく上で有用有益な信仰文書として編集編纂され、「律法と預言者」と共に諸会堂で用いられるようになったのだろうと考えられているが、各文書の成立過程や時期はほとんど知られていない。「箴言」も、オリエント世界の「知恵」の文化の影響下で編纂されたと推測される以上のことは、学者の間で合意を得られていない。

・日課箇所を含む「父の諭し」のまとめ(2章)は、22行詩の形式で整えられており、儀礼的に用いられた格言歌とも考えられている。「知恵」の担い手(賢者)は、王国時代にはオリエント諸国との交流を持つ王宮に招請されていたとも考えられているが、それは、おそらく「祭儀的文化」の担い手である祭司・預言者とは別の系譜に属する者たちだったのだろう。正典に収められた「知恵」の諸文書が、周辺諸国との交流を深めたとされるソロモン王に帰されていることから、彼らの中には、異国から招聘された「賢者」が含まれていたのかもしれない。しかし、南王国ユダの王宮政治では、祭司・預言者らが王の側近としての力をつけていった歴史があり、彼らが「知恵」の文化を吸収し、「賢者」に代わる役割を担っていったとも考えられる。それによって、「知恵」は、単なる経験的知識にとどまらず、「主の教え」として置き換えられたのであろう。

使徒書日課(1コリント2章より)

・「コリントの信徒への手紙一」の総論については、資料「聖書と祈りの会 220126」を参照。

・「パウロ書簡」中で「知恵(ソフィア)」または「知恵ある(ソフォス)」の用例は少なくないが(それぞれ26例と15例)、多くが「コリントの信徒への手紙一」に見られ(それぞれ15例と10例)、残りのほとんどの用例は「ローマの信徒への手紙」、「エフェソの信徒への手紙」、「コロサイの信徒への手紙」に限られる。つまり、パウロにとって「知恵」の概念は、彼の神学に不可欠の要素ではなく、想定される読者の理解を促すために敢えて導入しているものと考えられる。「知恵」は、ギリシア哲学文化の中で主要な概念であり、古典古代時代の哲学者は「ソフィスト」と呼ばれていた。後1世紀の時代、地中海世界の思想文化は、なおギリシア哲学の大きな影響下にあったとされ、哲学諸派がしのぎを削っていた。パウロが創設した教会のあったコリントは、アテネ近郊の港湾都市で、地中海貿易の拠点となっていたため多様な人々が入り出していたとされるが、文化的にはアテネの哲学界からの影響を強く受けていたと推察され、教会にも哲学的思索を好む人々が多かったのかもしれない。そのような教会の人々に向けて記した書簡で、パウロは、「知恵」という彼らが耳慣れた概念を援用して、福音を語り直そうとしたのであろう。

・本書簡で、「知恵」を用いた論考は、1:17 から始まり、3:20 まで断続的に続いている。3:20 以降、本書簡での「知恵」の用例は限定的である(6:5、12:8)。この論考で、パウロは、明らかに、ギリシア的な「人の知恵」を否定的に捉え、それに代わり得る「神の知恵」としてのキリストを前面に打ち出している。おそらく、ギリシア的な「人の知恵」を重んじ、その点でパウロが他の者に劣ることを指摘する者たちが、コリント教会の中に一定数いたのだろう。それに対して、パウロは、自分が宣べ伝えた福音が、「人の知恵」に基づく思索の結果ではなく、ギリシア的合理性に欠けた「キリストの十字架」という出来事(=神の御業!)に関するものであって、その意味でこれは「神の知恵」に基づく事柄なのだと言っている。

・パウロの「知恵」の論考は、この後、「聖霊」の論考へと置き換えられていく。すでに日課箇所直前で「知恵にあふれた言葉」が「霊と力の証明」と対比されていたが(2:5)、この後では、「世の霊」と「神からの霊」とが対比的に取り上げられていく。パウロの論考において「知恵」がそのまま「聖霊」に置き換えられるわけではないが、「知恵」という用語を用いたギリシア哲学的思考から、「霊」という用語を用いた初期キリスト教に特有の思考へと、読者であるコリント教会の人々の視点を移させようとしているのであろう。

・この移行に際して、「神秘(ミュステリオン)」(7節=1節「秘められた計画」)が一定の役割を果たしている。

福音書日課(マルコ 4 章より)

・日課箇所は、「種を蒔く人のたとえ」の語られた箇所。共観福音書が共通して伝えており、続いて弟子たちと限られた者たちだけに「たとえを用いる理由」が示され、さらに「種を蒔く人のたとえの説明」が語られるという構成が共観福音書で保持されている。ただし、「ルカ福音書」では、「マタイ」および「マルコ」と比べて叙述がかなり簡略化されている。

・主イエスのたとえ話で、その解釈についての主イエス自身による説明が伝えられている例は、ほとんどない。「種を蒔く人のたとえ」は、その点で例外であり、他には、「マタイ福音書」が並行箇所が続いて取り上げている「毒麦のたとえ」だけである。主イエスが、自身の語られたたとえ話を、その都度、弟子たちに解釈してみせたいとは思えない。そうであれば、たとえ話の伝承に定型的に解釈講話が加えられていたはずである。実際には、多くの場合、主イエスは自身のたとえ話の解釈を聴き手に委ねられたと推認される。

・主イエスがたとえを用いて語られた理由を、「マルコ福音書」は、「人々の聞く力に応じて」(4:33)のことであったとしている。これを文字通り受けとめるならば、主イエスのたとえ話は、「聖書」の専門用語などを知らない者にも理解できるように平易な事柄に置き換えて使信が語られる方法であったということになる。しかし、実際に共観福音書が共通して保存しているのは、「種を蒔く人のたとえ」を聞いた弟子たちが、主イエスからそのたとえの解釈について説明を受けなければ理解することができなかつた、という逸話である。すると、実のところ主イエスのたとえ話は、誰にでも理解できる平易な言葉による語りであるというよりは、その語りを聞くことによって聴き手の想像が掻き立てられ、問いを引き出すような働きをしているものとして描かれているということが分かる。つまり、聴き手に何らかの神学的思考を促す意図で、たとえが用いられたと見ることもできるのである。「マタイ福音書」では、この意図を拡大して、たとえを聞いた弟子たちが、その意味を主イエスによって知るようになるというところに重要な意義を見いだしていると考えられる。

・「種を蒔く人のたとえ」は、後段に置かれた「たとえの説明」(4:13~20)に基づいて理解することができる。すなわち、「種を蒔く人」に焦点を当てた一つの宣教論として理解し、宣教の成否に差が生じることを説明していると理解することができる。おそらく、それが初代教会で使徒たちによって示された「公式」の解釈なのだろう。しかし、この一連の「たとえ」を巡る箇所全体(4:1~34)を見渡して、別の視点から「種を蒔く人のたとえ」を捉えることもできるだろう。すなわち、「蒔かれた種」に焦点を当てた聖書論として理解し、「神の言葉」が人に働きかけることの神秘性と、そのことに対する受け手側の信頼という関係性を指し示す教えとして理解することもできる。

来週の誕生日 (2月13日~19日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-4番「世にあるかぎりの」(= I 62)は、C.ウェスレー(18世紀英国)の代表的な讃美歌で、彼が自身の回心経験を記念して作詞した。メソジスト歌集のみならず多くの教派歌集で採用されている。曲は、19世紀初めにドイツで活躍した音楽家 C.G.グレーザーの曲を19世紀米国の教会音楽家 L.メーンソンが編曲したもの。1954年版の曲は日本版独自のもの。
- ・21-470番「やさしい目が」(= III-8、こ-114)は、新しい創作讃美歌集として1976年に出版された『ともにおう』に採用された讃美歌で、中学英語教師の深沢秋子が作詞、作曲家で阿佐ヶ谷教会員・小山章三が作曲した。1983年版『こどもさんびか2』、2002年版『こどもさんびか改訂版』にも採用。
- ・21-195番「まかれた種」は、ノルウェー系米国人のルター派牧師オルセンの作詞。曲は、米国ルター派の教会音楽家・大学教授でルター派礼拝協会メンバーのジャッキッシュの作曲。

21-4「世にあるかぎりの」

O for a thousand tongues to sing

1. Oh, for a thousand tongues to sing / My great Redeemer's praise, / The glories of my God and King, / The triumphs of his grace!
2. My gracious Master and my God, / Assist me to proclaim, / To spread through all the earth abroad, / The honors of your name.
3. The name of Jesus calms our fears / And bids our sorrows cease. / 'Tis music in the sinners ears; / 'Tis life and health and peace.
4. He breaks the pow'r of canceled sin; / He sets the pris'n'ner free. / His blood can make the foulest clean; / His blood avails for me.
5. See all your sins on Jesus laid; / The Lamb of God was slain. / His life was once an offering made / That you might live again.
6. Glory to God and praise and love / Be ever, ever giv'n / By saints below and saints above, / The Church in earth and heav'n.

21-195「まかれた種」

When seed falls on good soil

1. When seed falls on good soil, it's born through quiet toil; where soil receives, the earth conceives the blade, the stem, the fruit, the leaves. Good soil, O mother earth, the womb, where seed takes birth.
2. God's Word in Christ is seed; good soil its urgent need; for it must find in humankind the fertile soil in heart and mind. Good soil! A human field! A hundredfold to yield.
3. Plough up the trodden way, and clear the stone away; tear out the weed, and sow the seed. Prepare out hearts your Word to heed, that we good soil may be. Begin, O God, with me!